ることを思わせる。

歌唱から歌詞をきゝとることはかなりむつかしい。それが古くから伝誦されてきたそれ程長くないものである場合は、ことばの意味が変化したり不明になっていることなどもあって特に困難であろうと考えられる。とすればそれを記載するに当ってはその発音の方を出来るだけ忠実に写そうとするということがなかったであろうか。一つの詞句を繰返し歌われる場合には曲節を異にする場合が多いようである。その際にみられる音節の長短、高低、強弱及びそれらに伴う音の変形、又連音によって生ずる音の変化などが、変字という現象となる可能性もありはしないかと思われる。神楽の類は、一定の間に於る歌い方は、旋律もことばの付け方も自由であったようである。しかしおのづから型はあるであろうし、現在行はれているものゝ旋律型による分類もなされている。[注7]

以上用例の数に於て十分とはいひ得ないし、神楽歌の曲節、歌の際の発声についてもよくわからないのであるから、積極的にはいうことは出来ず、否定しようと思えばなし得るかも知れないが、変字は可視性の問題ではなく仮名の表音性によるものとみえることが可能であると考える。[注8]（五十二年十二月）

注1　高木市之助「変字法に就て」（吉野の鮎）
注2　日本古典文学大系3「古代歌謡集」の飜字による
注3　意味の不明なものがあるので同一の歌の中のものゝみをあげる
注4　本末本末の四よりなる
注5　本末の注なきものは早歌
注6　「命星皮久波哉」別の解釈あり
注7　佐藤実佐子「雅楽の唄いものの旋律」（「東洋音楽研究」第三八号一二四頁）
注8　琴歌譜の引声とみられる母音に二種の文字があるのも音の関係とみられる。

つ　秘「川」、信・重「津」
と　信・秘「止」、重約三分の二「堵」
な　信・秘「奈・名」、重「奈・那」
の　信・秘「乃」、重「乃・能」
は　信・秘「波・者」、重「皮・波」
ひ　信・秘「比」、重「比・斐」で半分は「斐」
や　信「也」秘「也・哉」で殆ど「也」、重「哉・也」で大部分が「哉」
ゐ　信ナシ、秘「井・ゐ」で大部分「井」、重「為」
を　信「乎」、秘「乎・遠」で殆ど「乎」、重「緒・乎」で殆ど「緒」

信は信義本、我は神楽和琴我譜、重は重種本、秘・重では使用度数の非常に少いものは除く。

のように重種本とは相当の差異が認められる。この外重種本には求（く）、胡（こ）、楚（そ）、丹（に）、満（ま）、浪（ら）、力（り）、などのあることも注意される。よって重種本はこの二種の本を比較して、所収の歌数も多く、全体を通して楷書に近い真仮名を使用し、雄拍子、女拍子が同じ調子で付け通されていることなど、記載する目的がちがっており、用字の種数の差をみると、系統、性格を異にすると思われる。したがって変字は比較して考える必要がないであろう。

以上、重種本の変字はどのようなものとみるべきであろうか。これらが書かれたと推定される十世紀から十三世紀の頃には書は芸術的なものとしてその美を問題にされたということがある。とすればその見地からみる文字の配置の関係で、同字、変字といわれる場合の変字が考えられて然るべきであり、又文字使用の際の釣合、リズムなどの点から、そして記紀歌謡の変字、いづれにしても文字の可視性の関係としてまづ考えることが可能であろう。しかし重種本の場合は反覆の句にも変字のみられないものがあり、美的見地からの配置、又釣合、リズムという面からすれば、その存在には相当度の不規則性が考えられるのであるが、次のような一種の規則的な遍在とも思われる現象がある。即ち、採物は本末唱和の為に少しある反覆を除けば大体短歌形式、前張は民謡的な色彩のあるもので、大前張は中心となる歌詞が短歌形式、小前張は不整形式、星（雑歌も含む）には短歌形式、不整形式ともにあるが、その中で

反覆の句は採物では韓神のみにある。

反覆の句が本の最後、末の最初にある場合、大前張では変字は大体ないとみられ、小前張にはある。星には変字のあるものとないものとがある。

反覆句が本・末の最初にある場合は変字の使用されない場合が原則のように思われ、共に最後にある場合は変字が殆どある。

同じ音節が近接してある場合の変字は、採物に多く、他は殆どない。

というように、曲の種類、反覆の句の存在する位置に関係しはしないかと思われるのである。そして同一の歌詞である和舞と宮人を比較した場合、用字を異にするのも曲調の関係のものかとも考えられ、音節の反覆の符号が語とは関係なく同じ音節がつゞきさえすれば使用されており、はやしことばは全部が同一文字であることも、音の関係であ

知ゝ加々多皮ゝ加ゝ多（父が方母が方）　大宜
佐堵ゝ保美（里遠み）　杓
和加ゝ堵乃（我が門の）　杓
多斐乃ゝ志万（田蓑の島）　難波潟
阿伊曽ゝ乃仁部比堵（あいそ、其の贄人）　薄枕
也満斐堵ゝ（山人と）　葛

又同じ音節がすぐ近くにある場合、即ち一音節又は二音節を隔てて存在する五十数箇所については、「あ、い、く、と、の、は、ま、み、や、る」に十四箇所程の変字がみられる。中「い」と「は」[注6]は一方がはやしことばの類であり、「と」と「る」及び「や」の一箇所はむしろ「堵流也、止留也」とつゞく繰り返しの関係かも知れない。これを除けば神上にある一箇所を除き全部採物の曲である。尚五十数箇所についての音節の種類には、特に片寄りはみられないと思われる。その他はやしことばは歌を異にしても概して同じ表記であるらしく、しながが鳥、猪名野、我妹子、薄枕にわたり各々二つづゝがある「あいそ」は、我妹子の本（もと）の「阿以曽」を除をみな「阿伊曽」であり、その類とみられる大宮の「てゝにや」の三つ、蟋蟀の「おさまさ」二つに変字はない。

ところで神楽和琴秘譜と信義本は、重種本とは記載の態度がかなりちがっている。まず神楽和琴秘譜は歌数十首（中、殖槻の末、総角の本（もと）を欠く）に早歌五首、阿知女作法、千載法を収めるか、重種本にはない其駒と、早歌に由須利あけを含む。又文字には平仮名ともみられる草体のものがかなり多くある。信義本は二十一首、但し韓神は歌詞を一部異にして二首あり、早歌は一首のみで、重種本にはない北御門、気比歌、榊（採物であるが歌詞を異にする）が含まれている。文字は真仮名によるものは北御門、韓神、気比歌、採物（榊）、韓神、倭舞歌、狭居張歌（木綿垂で）の最初にある七首のみであとは片仮名を用いている。又歌の名の下に

採物合八種、十六首振皆同之
之名加取用早居張琴但件哥本末合六首依次各一度唱更以一哥数度不唱安知女不云

などの如く曲及び演奏する際の覚書と思われる注記があり、博雅三位の子の源信義の自筆であるか否かは別としても、書きぶり其の他からみて実際に演じていた人が、自分の覚えとして記したもののように感じられる。

この種の本についての変字は和琴秘譜には

いかきけさしすせた
ちなはまみむやるを

の十八の音に、信義本には

いきけなにはみり

の八音に存在し、その多くが重種本にもある音なのであるが、使用数が少いので比較の対象にはならないと思われる。ところがその音に用いられる文字については、

え　重「江」、秘「衣」、信ナシ
き　信「支・吉」、秘「支・き」、重「木・幾・支」の中約三分の二が「木」
こ　信・秘「己」、重「古」
ち　信「千」、秘「知・千」、重「知」

次に語、その他についてみる。[注3]

佐加木皮本　佐加木波末　（榊）

見天久良、美天久良本　美天久良末（幣）

津恵、津恵、都恵本　哉万津恵末　（杖）

佐々、佐々本佐々末　（篠）

哉万、也満斐堵、哉万加津良本　見哉摩　堵哉麻末

哉万加津良本　加津良末

也満斐堵、飛堵本　（葛）

由美、宇津佐由見、万由見、津持由美本　万由見末　（弓）

多知本　多知末　（劔）

世加為本　以多為末

見津本　志見津　見津佐飛末　（杓）

加見本　加見末　（大宜）

乃利太利乃利多利末

布祢　布祢本　不祢末　（しなが鳥）

為奈本　為奈末

志木加波緒堵、志木加波緒止本　（猪名野）

堵利本　止利、堵利、堵利、堵利、堵利、堵利末　（我妹子）

仁部斐堵本　仁部比堵末　（薄枕）

古須介、古須介本

斐皮利、比波利末　（賤家の小菅）

之良〻乃皮万、万志良〻乃皮万本

多万本　曽乃多万、曽乃多万末　多万本　毛天本　毛天末

加世之毛末　加世之毛本　加世志毛末

安佐利末　安佐利末　（しら〻の浜）[注4]

以津久世、万以津久世本

左〻介　左〻介

於呂之　於呂之末　（紳波）

毛利哉　毛利也末

堵流也　止留也末　（殖槻）

子津〻良　古津〻良　（深山の小葛）[注5]

之利奈留古　左支奈留古　（あかつり）

世也古　世也古　（あちの山）

之利古曽　之利古曽　（舎人）

阿布利止、阿不利止

比皮利止、比皮利止　（翻り戸）

太仁　多仁

緒加良以加尤　緒加良伊加波　（谷から）

須戸加美本　須戸加見末　（神上）

この他、得選子の中の「堵古世利古、堵久世利古本　堵久世利古末」も同じ語と考えられるであろう。助辞の類については

之良〻乃皮万尓万志良々乃皮万仁　（しら〻の浜）

左々介天波……於呂之天皮　（細波）

のように変字がみられはするが、解釈、扱い方に問題があるので一応考えないことにする。

その他同じ音節がつゞく場合は「〻」によって示しているが、次の例のように個々のことばとは関係なく用いている場合がみられる。

志奈〻木毛能加（品なきものか）　弓

久波哉古〻那利哉奈仁之加毛古与比乃津木皮多〻古〻仁万須哉
（本）
久皮哉古〻奈利哉奈仁之加毛古与比乃津木皮多〻古〻仁万須哉
（末）　明星（星）
多〻良古木比与哉太利哉良古木比与哉（本）
多〻良古木比与哉多利哉良古木比与哉（末）　得選子（星）

ハ、本の最後と末の最初にあるもの

斐佐堵保志
斐佐堵保志　和儛
飛佐堵保志
斐佐堵保志　宮人（大前張）
阿万古呂毛
阿万古呂毛　難波潟（大前張）
伊奈乃保乃
伊奈乃保乃　木綿垂で（大前張）
阿女不礼堵
阿女不礼堵　榛（大前張）
曽乃皮止曽乃皮止之万仁
曽乃者止曽乃皮都志万仁　しらゝの浜（小前張）
曽緒於毛布堵
曽緒於毛不堵　総角（小前張）
阿佐太津称
阿佐太津称　木綿作る（星）
多久保乃介
多久保乃気　湯立（星）
和加佐久良
和加佐久良　湯立（星）

ニ、その他

於保与曽古呂毛（本の中）
於保与曽古呂毛（末の最後）　和儛
於保与楚古呂毛（本の中）
於保与曽古呂毛（末の最後）　宮人（大前張）
加世之毛也美奈皮（本の最初）
加世志毛也美奈皮（末の中）　しらゝの浜（小前張）
多万奈良皮（本の中）
多万奈良皮（末の最初）　大宮（小前張）

以上によれば反覆があるのは前張に多く、特に大前張は本の最後と末の最初に五音の句を繰返すものが多く、これには変字がない。他の場合は殆ど変字を含む。尚、小前張の蟋蟀（きりぎりす）の歌詞は最初の句を除くのみで同じものを末で繰返しているので、右には扱っていない。又和儛の歌詞は大前張の宮人と同じであるが左のようにその用字が異なっている。

和儛

本　美哉斐堵乃於保与曽古呂毛斐佐堵保志
末　斐佐堵保志木能与呂志毛与乃於保与曽古呂毛

宮人

本　見哉斐堵乃於保与楚古呂毛飛佐堵保志
支　斐佐堵保志木乃与呂志毛与乃於保与曽古呂毛

	ま	み	む	め	も	ら	り	る	れ	ろ
	66	62	17	27	59	67	78	40	40	24
	30	30	14	16	32	27	29	25	23	15
	2.2	2.1	1.2	1.7	1.8	2.5	2.7	1.6	1.7	1.6
	万(59)	未(4)	満(1)	摩(1)	麻(1)	美(22)	見(40)	牟(11)	无(6)	女(27)	毛(59)	良(64)	浪(2)	羅(1)	利(77)	力(1)	留(30)	流(10)	礼(40)	呂(24)
	万未(4)	万満摩麻(1)		見美(8)	牟无(3)	良浪(2)	良羅(1)	留流(4)
	や	ゆ	よ	わ	ゐ	ゑ	を
	105	13	37	28	11	7	51
	35	8	19	22	7	4	22
	3.0	1.6	1.9	1.3	1.6	1.8	2.3
	哉(90)	也(15)	由(13)	与(37)	和(28)	為(11)	恵(7)	緒(50)	乎(1)
	哉也(5)	緒乎(1)

次に句の反覆とその用字をみてみる。神楽は神おろしの意味をもつ採物、神あそびの歌としてみられる前張、神あがりの歌である星の三種に分けられ、曲の性格にも差があるようである。次に唱和する為に分れる本と末と、その中に於る句の位置によりまとめてみる。

イ、本・末の最初にあるもの

志奈加堵留哉　猪名野（大前張）
志奈加堵留哉
阿佐久良哉
安佐久良哉　朝倉（星）

ロ、本・末の最後にあるもの

和礼加良加美波加良緒木世牟哉
和礼加良加美皮加良緒木世牟哉　韓神（採物）
布称加多不久奈
不称加太不久奈　志奈加鳥（大前張）
志木津木乃保留阿美於呂志
佐天佐志乃保流
志木津木乃保留阿見於呂志
佐天佐之乃保流　蔦枕（小前張）
多比津留阿万乃
多斐津留阿万能　磯長崎（小前張）
天布加佐乃阿佐知乃波良仁
天不加佐乃阿佐知加波浪仁　殖槻（小前張）
堵良之奈哉度良之奈哉〻津奈加良
堵良志奈哉
止良之奈哉堵良之奈哉〻津奈加良
度良之奈哉　湊田（小前張）

詞は楷書に近い万葉仮名により、右傍に朱輪、小朱輪で雄拍子、女拍子を付している。又一般の神楽歌とは詞句の差違もかなりあるようであり、繰返しの句の略されているものもあるかとみられる。

左に使用文字を表にしてあげる。歌は全体にさして長いものはなく、早歌の如く非常に短いものもあるので、歌により含む音節の種類に片寄りがある。したがって変字の存在も、その音節の全体に於る使用数、又一首の歌の中の使用数にかなり関係すると考えられ、五十音図に於る行や段についての傾向はないように思われる。

・歌数はその音節を含む歌の数
・一首当りの音節数はその音節を含む歌のみのもの
・変字の括弧内の数はその文字の組合せを含む歌の数

	あ	い	う	え	お
音節総数	60	48	9	5	36
歌数	19	22	5	5	17
一首当り音節数	3.2	2.2	1.8	1	2.1
文字(数)	阿(38)	安(22)	以(34)	伊(14)	宇(9)	江(5)	於(36)
変字(数)	阿安(3)	以伊(6)

	か	き	く	け	こ
音節総数	134	54	35	25	78
歌数	41	27	20	16	29
一首当り音節数	3.3	2	1.7	1.6	2.7
文字(数)	加(134)	木(40)	支(12)	幾(2)	久(33)	求(2)	介(20)	氣(5)	古(74)	己(2)	胡(1)	子(1)
変字(数)	木幾(2)	木支(2)	久求(2)	介氣(1)	胡古(1)	己古(1)	子古(1)

	な	に	ぬ	ね	の
音節総数	72	48	3	19	135
歌数	29	30	2	12	34
一首当り音節数	2.5	1.6	1.5	1.6	4.0
文字(数)	奈(50)	那(22)	仁(42)	丹(3)	尓(3)	奴(3)	祢(19)	乃(125)	能(10)
変字(数)	奈那(7)	仁丹(2)	仁尓(2)	乃能(8)

	さ	し	す	せ	そ
音節総数	76	89	25	32	51
歌数	34	27	18	17	25
一首当り音節数	2.2	3.3	1.4	1.9	2.0
文字(数)	佐(66)	左(10)	志(53)	之(36)	須(18)	世(31)	勢(1)	曽(50)	楚(1)
変字(数)	佐左(1)	志之(5)	世勢(1)	曽楚(1)

	た	ち	つ	て	と
音節総数	66	21	53	54	106
歌数	28	15	28	21	36
一首当り音節数	2.4	1.4	1.9	2.6	2.9
文字(数)	多(52)	太(14)	知(21)	津(49)	都(4)	天(50)	豆(4)	堵(75)	止(26)	度(3)	都(2)
変字(数)	多太(3)	津都(2)	天豆(1)	堵止度(1)	堵度(1)	堵止(4)	堵都(1)	止都(1)

	は	ひ	ふ	へ	ほ
音節総数	103	58	36	13	28
歌数	34	29	22	10	12
一首当り音節数	3.0	2.0	1.6	1.3	2.3
文字(数)	皮(67)	波(35)	者(1)	比(29)	斐(26)	飛(3)	不(25)	布(11)	部(8)	戸(5)	保(28)
変字(数)	皮波(12)	皮者(1)	比斐(5)	飛斐(3)	不布(5)

神楽歌重種本の変字

中村直子

記紀の歌謡の用字には、同一句又は類似句の反覆に於て、多数の反覆字に少数の文字だけをことさらに変えて用いる、変字法といわれているものがある。そしてそれについては言葉を精密的確にうつすという用字上の意味とはかかわりなく、又音韻とも無関係であるものと考えられている。[注1] しかるに古歌謡の譜本で、平安初期の成立と推定され所収歌数二十一首の中に五首の記紀にみえる歌を含む、琴歌譜の反覆の部分をみると左のようなことがある。[注2] 例えば最初にある「しづ歌」の「つきあます、いよ」については、

都吉ㄴ阿和廻上ㄴ安ㄴ阿楽安ㄴム麻ㄴ須如返曳出宇ㄴ宇上ㄴ宇
都宇吉伊伊伊丁阿阿ム麻阿ㄣ丁須宇
都吉伊々丁阿阿ム麻阿須宇
都吉伊伊丁阿阿ム麻阿須宇
都宇宇吉伊伊伊丁阿阿ム麻阿ム ㄣ丁須宇
都吉伊伊丁阿阿ム麻阿ㄣ丁須宇
伊ㄴ与和廻上ㄴ又同於ㄴフ応丁
伊伊丁ム余於下々　伊丁ム余於丁々
伊伊余上於於フ応丁
伊伊丁ム余於丁於　伊伊ム余於丁於

であり、次の「歌垣」の「あはぢのみはらのしの、うゑつ、しの」については、

安波遅伊伊ム乃上於下美波良ム乃上於下之乃安波遅伊伊ム乃於美波良ム乃
之乃丁
宇恵亜々豆宇上　之伊ㄣ丁乃
宇恵亜々丁都宇宇　茲伊ㄣ小丁ム努　之丁能上於於フ応丁
宇宇宇会亜亜々丁都宇　志伊　丁能於　之伊丁ム努於丁於
宇会亜々丁都宇　志伊　丁乃於　茲ム能於丁於

であって、譜の解読の問題やこの類の私的な覚え書に考えられる表記の事情を考慮に入れたとしても、曲調にちがいのあることは否み得ないと思われる。そしてそこに変字もあるのである。

ところで平安時代、平仮名が既に相当程度使用されていたにもかかわらず真仮名の表記がなされているものに、神楽歌催馬楽などの同じく歌謡の類がある。これらの変字にはどのようなものがあるであろうか。神楽歌・催馬楽についての記録の古いものとしては、神楽歌の神楽和琴秘譜・信義本・重種本と催馬楽の鍋島家本があげられるが、鍋島家本が書写されたとみられる平安後期には藤原師長による旋法などの整理があったようであるので、曲調との関係も予想され得るものについては適当ではないと考えられる。和琴秘譜・信義本については、途中で記録の態度が変っており、変字をみる対象となる歌数が少いということから重種本により、必要な部分を対照する方法をとることとする。

重種本には阿知女作法、採物八首、前張六首、小前張九首、早歌十首、千載法、その他十首を収め、庭燎、片折、諸挙等の曲はない。歌